
松沢一族

はら まき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

松沢一族

【著者名】

はら まき

N6830C

【あらすじ】

昭和初期、因習の業を背負つて一人の男が生まれた。名前を松沢筆。江戸時代から続く松沢一族は、その血を血族結婚で保ってきた。平成の世まで続く彼の業と、血に濡れたその生涯。

松沢 肇

まつざわ 家、さかい 家、やがみ 上家。この三つの家の家系図を辿れば、一人の男に辿り着く。

まつざわぎんじ
松沢銀次

彼は肥後藩細川家に仕えた厩番。元は農民の出自にありながら、馬を育てる事に掛けては天下一品。年貢の米に加えて、見事な葦毛の駿馬を献上し、藩主の覚えめでたく、直々に苗字と家紋を賜った。

「銀次の家の近くには、でっかい松が植つた沢があつてな。銀次の育てる馬は皆、その沢の水を飲ませとつたんや。そこで、殿様に松沢の苗字をもるたんや」

丸に十の家紋を同じくするこの三つの家は、松沢一族としてその後平成の世まで血族結婚を繰り返す。

これは松沢一族の血塗られた記録の一部。

昭和二年。

「また女か！」

三日三晩のお産に耐えたお梅が、夫である充から最初に投げ掛けられた言葉がそれだった。

「すいません……」

お梅が生まれた我が子を悔しそうに見ながら、絞り出した掠れ声で謝るのも、もう四回目。今日生まれたのは、松沢充とお梅の四番目の娘だった。

「次は男を生め！ 松沢の跡取りを早よう生め！」

充は吐き捨てる様に言い残し、襖を乱暴に閉めた。充の足音が遠ざかるのを聞きながら、お梅はまだ初乳もやつていない赤子に顔を隠す様に頃垂れ、着物の袖で涙を拭う。

なんで男に生まれてくれたのかと、何の罪もない赤子に怒鳴りつけないだけまだマシだった。いや、内心怒鳴りつけていた。口に出さないだけで、お梅の胸の中は、到底母親とは思えない程の毒と恨みですし詰まり、瘴氣を放つ。こんな胸の内など、愛する夫に見せられるわけもない。

お梅は松沢一族内の人間ではなかつた。元の名を田島と言い、地元神社の神主である松沢と懇意にしていた商屋の娘だった。

松沢本家当主、暁の弟、充に見初められ、駆け落ち同然で一緒になつた彼女を、松沢一族は認めていない。

一族きつての美丈夫と言われた充。もともと彼には一族内の娘と縁談があつたのだが、充はどうしてもと聞き入れず、皆の反対を押し切つて他家のお梅を嫁にした。

彼はお梅の辛抱力のある根性と、丈夫な体を彼女の見た目以上に好いており、男児が生まれない事以外では大変に彼女を可愛がつていた。

松沢の家督を継げなかつた次男の充が、男児を切望するのには訳があつた。本家たる暁夫妻に一人も子が居ないので。充に男児が生まれれば、その子が家督を継ぐ可能性がでてくる。今は大工兼、消

防自警の充だが家督を継げば暮らしそのものが変わる。

一族の華の様にひ弱な女ではなく、大根よろしく丈夫でしぶといお梅を娶つたのも、犬の様に子供を産ませる為だつた。子は多ければ多い方が良い。数打てばいつかは男が生まれる。そうたかをくくつても、続けて四人も女が生まれれば腹も立つ。それも揃いも揃つて蓮つ葉揃い。松沢の娘が聞いて呆れる。やはり畠が悪かつたか。そう思うとや切れれない気持ちになつて、充は街の女に手を出しては、手当り次第に子胤をばら撒いてくるのだった。

(今宵はまたお戻りになるまい)

女が生まれた日には必ず家をあける夫を嘆きながら、お梅は腹を空かせて泣き出した赤子に目もくれず、戸棚に隠していた饅頭を一人で黙々と貪つた。

(早よう体力を戻さねば。まだ子胤を戴いて、次こそは充様のお子を生んでみせる!)

娘なぞ充の胤でも充の子ではないと言わんばかりに、お梅はひたすらに饅頭を口に押し込んだ。先に生んだ三人の娘達が、そんな母の後ろ姿を指を加えてじつと見てている。名家の娘にあるまじきボロを纏つた姉妹は、実の母お梅の下僕だった。

腹を満たしたお梅は、六歳の長女のお初に、米の研ぎ汁を赤子に飲ませるように命じると、自分はじろりと横になつた。隣で泣き喚く赤子を視界から外すように目を閉じて、松沢が奉る神に手を合わせる。

(どうか、充様のお子を授けてくださいまし。男児を、跡取りを早

よう授けてくださいまし）

お梅の願いは七番田に生まれた男児でようやく叶う事になる。松沢肇。^{さわはじめ}業を背負つた男の産声は、昭和十一年に響き渡つた。

「充様、肇さん。どうぞお上がりになつて下さいな」

「父様、頂きます」

「ああ」

第一次世界大戦が始まつて四年、昭和十八年。肇は七歳になつていた。

年を重ね精悍さが増した父と、戦時中にも関わらず絹の着物を着た長男。一人の前に、朝から雑炊、白米、蕎麦の三種類の主善が並ぶ。副菜には新鮮な魚、野菜がバランス良く並べられ、日によつて二人の男は好きなものを好きなだけ食べるのだ。

そこに母 お梅と、木綿のボロを着た肇の八人の姉妹が文中よろしく傳き、父と長男の残した残飯を待ち構える。それが松沢充家の食卓だつた。

充とお梅の間には、肇の後に一人の女児が生まれた。八番田の八重子、九番目の節子だ。充の目論み通り、本家の暁夫妻には子が生まれず、暁は何度か妻を変えたが結局は擦りもしなかつた。

（兄貴がよもや胤無しとはな）

内心、舌を出してほくそ笑みながら、充は肇が十歳になれば、暁

の養子に出す約束をした。これで肇の将来は松沢一族の当主。充はその父親だ。

もう一人控えの男児が欲しくてお梅を孕ませたが、二人とも女。八人も女ばかりを生んだ女腹も、たった一人男児を生めば可愛い恋女房。充はお梅を離縁する事なく側に置いた。

充の一粒胤の肇は、一族きつての美丈夫と言われた充の生き[写し]。整つた凜々しい眉に、高い鷺鼻。甘い一重の双眼は斜に構えて爽やか。薄い唇の口角を上げて笑えば、僅か七歳とは思えぬ色男つぶりに、早くも将来は女泣かせかと噂された。

そんな息子を充は誇らし気に可愛がり、お梅は「肇さん、肇さん」とまるでお代人の様に跪いて育てた。

肇の八人の姉妹は皆彼の下僕だ。肇が「あれ」と言えば水飴を買ひに走り、肇が「これ」と言えば芋饅頭を蒸す。誰も彼もが肇の言ひなりで、彼が頭を下げるのは父 充だけだった。

筆が国民学校に上がる時、お梅は肇に上等の絹の着物を五枚と、充と揃いの下駄を買い与えた。

荷物を姉妹に持たせ、腕を胸の前で組み、澄ました顔で肩で風を切つて飛んで歩く肇の姿は、近所の子供達の憧れの的だった。

生来、我が強い割りには外面が良い肇は、学級で一番貧乏だった鶴岡創士つるおかそうじといふ少年と仲良くなる。

「なあ鶴岡君、友情の証に俺達の着物を交換しないか」

肇からのその申し出を、鶴岡は勿論すぐに断つた。

「何を莫迦な事を！ 松沢君の着物は絹じゃないか。俺のこれは破れてこそないが木綿の古着だ。とても公平じゃないよ」

「まあまあ、そう言つてくれるなよ。俺達の友情はそんなチンケな物差しじゃ計りきれないのさ。俺はお前助けるし、お前は俺を助けてくれるだろう？」

「勿論だよ、松沢君」

結局その日、肇と鶴岡は互いの着物を交換したのだ。

肇を迎えた長女のお初は、朝と違ひ出で立ちの弟に驚いた。

「肇ちゃん、その着物はどうしたのー？」

家の中で、いや町内で一番上等な着物を着ていた弟が、今は木綿の古着を着ているのだ、無理もない。

「まあまあ、慌てなさんな。楽しい遊びを思い付いてね、ちょっと鶴岡君に恵んでやつたのさ」

「鶴岡ですか？ あの寺横の長屋住まいの鶴岡かい？」

寺横の長屋と言えばボロもボロ。雨漏りのする屋根と、隙間風だらけの壁が申し訳ない程度についた、おおよそ家とも呼べない掘つ立て小屋だ。肇が飼っている柴犬のフクの小屋の方が、狭いながらも立派だろう。

「やうやく」

「なんて事を！　お母様が聞いたら腰を抜かすわ！」

青ざめたお初の尻を蹴飛ばすと、肇は楽しそうに笑つた。笑う時のこの弟は実に色氣がある。お初はその笑顔にゾクリとしたものを感じた。

「はん、俺には俺の考えがあるのや。まあ見てな」

肇は家の前を流れる大川の闇を睨みながら、ザラついた木綿の襟をぐしゃりと掴んだ。

友情の証

「違う！俺は盗つてない！これは交換したんだよ！信じてくれよ、母ちゃん！！」

国民学校の帰りがけ、自転車に乗った巡査に呼び止められた鶴岡は、派出所に母親を呼ばれ、彼女にしこたま殴られていた。寺横の長屋住まいの鶴岡が、煤けた顔に不釣合いの絹の着物を着ていれば、もうそれだけで”如何にも怪しい風体”というもので、巡査が声を掛けるのも当然だった。

「松沢の坊ちゃんの着物を汚してはならん」と着物を引ん剥かれ、禪一丁にされた上で、乳飲み子を背負った母親に「情けない、情けない」と号泣されながら、交番の地べたに這いつくばって丸くなつた背中を拳で殴られる。鶴岡は俺が一体何をしたと、田にいっぴいの涙を浮かべて唇を噛んだ。

「そんなに俺を疑うなら、松沢君を呼んでくれよ。これは彼との友情の証に交換したんだ！」

鶴岡は思いつき立上がつて母親を振り払つと、真っ赤に充血した目で巡査を睨みつけた。その目は母親に信じてもらえなかつた事への恨みと、恥をかかされた怒りに燃えている。

「ふん……そつまで言つなら呼んでも良いが、お前が予め松沢の坊ちゃんを齎しているかもしれんじゃないか」

しつと言い切る巡査に、鶴岡の母親は青くなつた。いつの間に自分の息子がそんな悪になつてしまつたのかと情けない一方で、信

じたい息子を信じきれない思いがよぎる。巡査の田の前で打つて打つて打ちのめせば、息子が盗みを認めて罪が軽くなるかもしれんと思つて殴つてみたが、息子は一向に口を割らない。それどころか自分を払い除け、巡査を睨みつけているのだ。

「何とでも言うがいいさ、俺は盗つてない。交換したんだ。松沢君が俺の着物を持つていろさ」

鶴岡の眼差しは力強く凛としている。その田に巡査は顔を顰めるど、人を松沢の家に走らせた。

筆がお初を伴つてのんびりと歩きながら家に帰つてきたとき、母お梅は玄関先で使いの巡査と話をしていた。お梅は眉間に皺を寄せ、氣を揉みながら筆の帰りを待つていたのだ。

「筆さん！」

土手を歩く筆の姿を田に留めて、お梅は脇田も振らずに駆け寄つた。筆の前に両膝を付いて彼の肩を抱き締めると、彼の頬を摩り、手を摩り、脚を摩り、どこにも怪我がないかを確かめながら、半泣きになつて喚き散らす。

「筆さん、嗚呼、無事で良かつた！ 巡査さんから聞きましたよ。行きがけの着物はどうしたんです？ 鶴岡の小倅が貴方に何かしたんでしよう？ どこも怪我はないの？ 貴方に何があつたらと思うと生きた心地がしなかつたわ」

巡査からどうこう風に話しあを耳に入れたか知らないが、お梅はま

るで肇が鶴岡に苛められて、絹の着物を奪われたように言つ。それは肇の自尊心を傷つけるに十分で、彼は酷く憤つた。

「巡査だつて？ 何がどうしてそうなつたのか知りませんが、着物は鶴岡君と友情の証に交換したのです。彼はとても気持ちの良い男で、俺の良い友達ですよ」

「な、何ですつて？」

巡査に聞かされた話と全く違つていて、お梅は酷く狼狽した。しかし肇が嘘を吐く筈もないし、その利点もない。彼女は巡査に目をやると、視線でどういう事かと問い合わせ正した。

「巡査殿、まさか鶴岡君に盗人の疑いが掛かつてゐるわけじやないでしょうね？」

幼いとはいゝ、松沢の血を引く肇の双眼は鋭い。正面から肇に睨まれた巡査は、思わず一步後ろに下がつた。

「そ、そのまさかだ」

「はん、俺も馬鹿にされたものだ。どれ、ひとつ鶴岡君の無実を証明してやらなくては」

肇はお梅とお初を伴つて、巡査の案内で鶴岡が拘束されている派出所までやつて來た。そこには泣き喚く赤子を背負つた鶴岡の母親と、禪一丁の鶴岡、鶴岡を真上から睨みつける巡査が居た。

「鶴岡君！」
「松沢君！」

肇は鶴岡を呼び、鶴岡は救われた様な眼差しで肇を見やつた。

「これは一体どういう事ですかー?」

巡査が持っていた絹の着物をふんだくつて鶴岡の肩に掛けてやると、筆は足元にすがり付いてくる鶴岡の母親を、汚いものを避けるように飛び退いた。

「こちらの巡査殿からちょいと話しを聞きましたが、俺は鶴岡君とは友達です。苛められたりなどしていません。着物は友情の証に交換したのですよ」

「しかし、それをどう証明するね?」

巡査の言葉に筆は真っ直ぐ胸を張った。

「今、俺が彼の無実を自ら進んで証言しているのが証明です。俺が彼に苛められているのなら、これ幸いに彼の罪をぶちまければいいのだから。俺は彼に苛められてなどいないし、俺は彼の友達です。俺は彼を助けに來たのです!」

「ま、松沢君……」

鶴岡は筆の啖呵に感動し、今まで堪えて流すことのなかつた涙をボロボロと零しながら、絹の袖口に染みこませた。

巡査から解放された鶴岡は、「ありがとー、ありがとー」と言いつながら筆の手を固く握った。

「なあに礼には及ばない。俺が君を助けるのは当然じゃないか」

「松沢君、君のような立派な友達を持つて俺は幸せだ」

筆は泥に汚れた鶴岡の手を、両手で包むようにして握った。彼の田は無実の罪を着せられた友を労るそれで、とても優しい。

「だがな、君の親が君を信じないのが俺はどうにも腑に落ちないよ。君の様に気持ちの良い人間はいない。それを己の息子を信じないとは。 小母さん」つづってはなんですが、小母さんが酷いですよ

筆は項垂れて後ろを歩く鶴岡の母親を責めた。それに便乗するよう鶴岡は派出所で堪えていた恨み節をぶちまける。

「そうひ、母ちゃん！ 何で俺の言つ事を信じてくれなかつたのさ！ 俺は盗つてないと何度も言つたのに。俺は母ちゃんに信じて貰えなかつたのが一番歯痒い！！ 巡査は貧乏家庭の小倅が、嫉妬に狂つて松沢坊ちゃんの着物を盗つたくらいに思つたかも知れないが、あれは他人だ。そして疑う事が仕事の人間だ。仕方もあるまい。だが母ちゃんは違うだろ？ 何で母ちゃんは俺を最後まで信じちゃくれなかつたのさ？ 母ちゃんは俺がそこまで腐つた人間と思つて打ちのめしたのか！？ 俺を守つてくれたのは松沢君だけじゃないか！」

鶴岡の涙に濡れた田は母親をしつかりと捉え、憎々しげに眉間に皺を寄せている。煤けた頬に涙の線がくつきりと蚯蚓のように這つて、彼の双眼を熱くさせていた。

「「めんよ、めんよ創士……」

今にも消え入りそうな声は、後悔と後悔と後悔に呟れて、鶴岡の母親は小さくなつた背中を更に丸めるよつこして頭を垂れた。

鶴岡はぐしごと涙を拭うと、やり切れないほどばかりにべっつと唾を吐き捨てて、母親に背を向けた。

「母ちゃんが俺を信じなかつた事は一生消えやしないわ。同じよつに、松沢君が俺を助けてくれた事も一生消えやしない。 松沢君、俺は一生君の友達だからな！」

「ああ！ 当然さ、鶴岡君。俺も君の友達だ！」

少年一人は仲良く肩を組んで、とっぷりと暮れた夕日を背に固い友情を誓う。この時肇は、人好きのする爽やかな笑みを浮かべながら、心の奥底では顔を苦々しく顰めていた。

（汚ねえ手でベタベタ触りやがつて糞が。後で念入りに洗わねえと気がすまねえや）

お梅は肇の大岡裁きを誇らしげに眺め、後ろで歩みを止めてしまつた鶴岡の母親を一瞥すると苦面を呈した。

「同じ母親として一言申し上げますけどね、奥さん。我が子を最後まで信じるのは母親の務めですよ。うちの肇が派出所まで出向いたんです、この件は松沢にも報告しますから」

「ほんに……ほんに情けないことです。奥様の仰る通りです。面目ない」

鶴岡の母親は流れ落ちる涙を隠しもせずに、ひたすらに頭を垂れて、脚を引きずるようにして家路についた。

松沢の男

肇にとつて鶴岡という友人は舍弟だった。悪さを働くにあたつての調度良い隠れ蓑になつたし、鶴岡は肇に恩義を感じており、否と言つこがない。肇の言つことには何でも従つ、都合の良い”友人”。それが鶴岡だった。

昭和十八年十月。肇が国民学校にも慣れた頃、充と肇は松沢本家当主、暁に呼ばれた。

「今時分に、暁様の御用は一体何で御座いましょう? 肇さんの入学のお祝いでしうか? そういうえば頂いておりませんものね」
「黙れ」

充は口が過ぎるお梅を一喝して黙らせるとい、肇の身支度を促した。

肇を産んでから、お梅は態度が大きくなつていた。彼女が産んだ一人息子の肇は、ゆくゆくは松沢本家当主、暁の養子になる。彼女は、末は本家当主となる息子の母親なのだ。その自負が彼女を奮立てており、地域住民への態度も大きく、婦人会の中でも女房の鑑と持て囃され、充自身も、彼女が持つ影響力も馬鹿にできなくなつていた。

他家から嫁いだ女として、松沢の中で身を小さくしているお梅は、もうどこにも居なかつたのだ。

その頃、第一次世界大戦は苛烈を極め、戦局も危うく、学徒出陣の徴兵検査が実施されていた。そんな中でも、松沢家から出兵しているものは下端を除き居なかつた。当時四十路の男盛りの充が出兵していくなくとも、周辺住民から不満の一つもでなかつたのにはわけがある。

この地域では松沢が全てを取り仕切つており、総合切符制で物資が不足しても、松沢が裏から手に入れた品物を横流しし、周辺住民へ配つていたのだ。それだけの力が松沢一族にはあつた。周辺住民は、松沢充を消防自警の長に据えて結束を強め、松沢に逆らう者が非国民。松沢がこの地域を守つていた。

暁率いる松沢本家と、彼の弟、充が率いる松沢分家 同じ松沢でも地域住民は充の方を親しんでいた。充は外面が良かつたし、何より女人人気があつた。

彼は酒も煙草も博打もしない。若い時分は女を侍らせることがあつたが、お梅が筆を産んでからはそれもなく、お梅だけを可愛がつていて。そんな男が地域を守つているのだ。出兵で男を取られた女達が、彼に傾倒するのも無理はない。加えてこの男は見た目が良かつた。年齢という深みを滲ませ、充はこの地域の、男の中の男だつた。その妻がお梅。お梅の矜持は如何ほどであつただろうか。

「失礼致しました。筆さん、くれぐれも粗相がありませんよつに
「大丈夫ですよ、母様。俺は松沢筆ですよ？」

たつた七歳の筆は、鶴岡を手に入れてからというもの、姉妹以外の人間の頭に立つ事の快感を覚えてきていた。自分がこの松沢を支配し、松沢が支配するこの地域を支配する。これはもう約束されたことと、彼は信じて疑わない。

生まれて七年。彼を謀る者など誰一人居なかつたのだ。彼は父親である充を尊敬し、父の様になりたいと思つようになつていた。

「肇、行くぞ」「
はい、父様」

充、肇親子は、堂々と正面きつて松沢本家に乗り込んだ。

「嗚呼、わざわざ呪を運んでもらつてすまんかつたね、充」「いいえ。お呼びとあれば何時でも」

松沢暁は後ろに流した髪を撫で付けて、ざつかりと上座に腰を下ろす。充は暁が座つた気配を感じて、ゆっくりと顔を上げた。

さすがは松沢本家の当主。その身が放つ威圧感は充でさえも身が竦む。

二人が決定的に違つたのは目だつた。暁のそれは優し氣に垂れて、彼の人の良さを教える。事実、暁は性根が真つ直ぐの男で、地域住民の為に物資を工面していたのは彼だつた。加えて人に恩着せがましくするのを好まない性質で、表になかなか出てこない。それを消防自警の長という立場で、都合の良いように口の手柄の様にしていたのが充だつた。

そして、充が肇を得た事、何も知らない住民の信頼が充に集中した事で、この兄弟の力関係は、大きく変わつていた。

戦時中とは思えない静けさ。否——ここは男同士の戦の真っ只中だつた。肇は緊迫した空氣の中、黙つて頭を下げたまま息を飲む。いずれ義父となるこの叔父に名を呼ばれるまで、彼は顔を上げるこ

とも、言葉を発する事もできない。

「今日呼んだのは他でもない。養子の件だ」

ピクリと肇の手が動いた。自分の事を話すのだと分かつたからだ。

「左様ですか。肇を兄上の養子にとつて件は、俺も異存ありません

充は出された茶の蓋を取りながら、鷹揚に頷いた。これはもう決定事項だ。肇が十歳になれば、暁の養子に出す。もちろんお梅も異存ない。

「否、その件ではないのだよ

「は」「

充の手が止まった。

「充、堺千代子を覚えているか？」

堺千代子とは、松沢一族の中のひとつ、堺家の娘で、暁と充から見れば再従妹に当たる女だ。年は三十一歳。一度 暁と結婚したが、程なく離縁している。今は独身のはずだ。

「ええ。それが何か？」

「あれに子があつてな

充は目を見開き、暁を凝視した。充が間抜けな顔をしていたのがぞ可笑しかったのだろう、暁はニンマリと嫌らしい笑みを浮かべながら、「おい、入れ」と襖の向こうに声を掛けた。

「失礼致します」

そう言つて入つてきた青年は、充の生き[写]しだった。もちろん、筆にも似てゐる。年の頃十五、六。背は高く、短くすつきりした黒の短髪。斜に構えた一重の双眼に、高い鷺鼻。まさしく若かりし頃の充がそこに居た。

「な……。誰だ？」

充の疑問を解いたのは暁だつた。

「俺が千代子と離縁して半年も経たぬ内に、あれが身籠つたと言つてきてな。よもや俺の子かと産ませてみたら、”これは充の子だ”と千代子が言うのだよ」

「は……？俺の子？」

充は記憶の糸を懸命に探つていた。千代子、千代子、堺千代子……。

そう、あれは四番目の娘が生まれた日、むしゃくしゃして街に出て、そこで女を引っ掛けた。誰でも良かつた。ちょいと後ろ姿と、尻の具合が良さうだったから、声を掛けた女。それが堺千代子だつた。

嗚呼、これは義姉さんじやありませんか。お久しぶりですね。

あら充さん。あたしはもう暁の家内じやありませんよ。ひと月前に離縁されました。

そうでした、そうでした。まあ気にする事はありませんよ、兄貴が胤無しなんだ。

分かつてくれるの充さん。

煙を変えて駄目なら胤が悪いのさ。どれひとつ俺が証明してやろうか。

あらあら、いけない人ね、女腹に飽きが来たの？

そうさな、そろそろ俺も他の畠を探すかな。お前さんが俺の子を産んでみるかね？

そんな会話の流れで、何日か宿に囮つてやつたのを思い出す。別れ際に「お前は良い女だよ」と言つてやると、はにかみながらも満足そうに笑つた女、千代子。

「千代子は離縁するまで、俺の懐に在つた女だ。女が充の子だと言つても、なかなか信じられんでな、離れて育てさせたら何のことはない、お前そつくりに育つじやないか」

「……」

自分そつくりの青年に目を奪われていた充が、暁に視線を戻せばそこに居たのは鬼だった。充血した目を釣り上げ、鼻の穴を膨らませ、腹の底から滲み出る恨みの瘴氣を振りまい、顔を真っ赤にした赤鬼。

「貴様ア、どこまで俺を馬鹿にすれば気が済むんだ！――

「な……」

雷が落ちたかと思った。暁が力いっぱい拳で机を叩いた衝撃で、蓋が取れた充の湯のみが倒れて零れる。広がる新緑の液体が畳に滴り落ちるのを、肇は震える手を握りしめて、じつと見つめていた。

「まあ良いぞ。約束は約束だ。お前の子を松沢の跡取りにする。ただし、それは――」

鬼は田元を緩めて青年を手招きすると、自分の隣に座らせる。

「IJの松沢昭だ」

昭と紹介された青年は、キリリと爽やかな笑みを浮かべると、充に向かつて丁寧に頭を下げた。

「松沢昭です。お父様、お初にお目にかかります」

見知らぬ青年に、だがしかし、自分の生き[写]しの青年に”父”と呼ばれ、充は狐につつまれた顔をしながら、顔を顰めた。

「お前など知らん。お前は俺の子ではない。父などと呼ぶな。汚らわしい」

「ああ、そうや。IJはお前の息子じゃない。俺の息子だ。俺が、俺の手で十五年育てた、俺の息子だ」

暁は昭の肩をぽんぽんと叩くと、鷹揚に湯のみの蓋を取り、茶を啜つた。

「籍も俺の息子として入れた。離縁した女が離縁した年に子を産んだんだ。俺の子とするのが当然だ。他その子を産んだなぞ、恥も良いところさ」

「……」

「だがどう見ても胤はお前だ。だから一応お前に断つておIJIと思つてな。ハハハ」

充の拳にギリギリと力が入り、その目が怒りと動搖に塗れしていく。

「俺が千代子など抱いておらんと言つたうじつだ」

「ふん。それで？ 昭の顔を見れば一発だ。明らかに堺の血より松沢の血が濃い。これは松沢の男だ。お前の子でなくて結構。これは

俺の子だ。何か文句があるか？

暁は余裕だ。鼻で笑いながら充をいなす。昭の目にも動搖はない。最初から示し合わせてているのだ。彼は暁に育てられていたのだから。

「俺は認めん。俺の息子は肇一人だ」

「貴様如きの認めなどいらん。松沢の当主はこの俺だ。俺が昭を俺の子だと認める。それが全てだ。アテが外れて残念だつたな。クク
クツ　アハハ！　アーハツハハハハ！！」

暁は高笑いしながら、昭を引き連れて部屋を出ていった。残されたのは、奥歯が割れるほど噛み締めた充と、一度も名を呼ばれる事なく、黙つて頭を下げたままの肇。

肇は、この時初めて、”恥”が何たるかを知った。

離れの千代子

ほら、俺のと兄貴のと、どちらが味が良いか？ ん？
ああん、充さんが良いよお～。良いよお、ああん、そこお、も
つとお～。

直そうに呑み込みやがって、ええ？ ほらもつと鳴け、ほり、こ
こか？ ああ？

いい～ア ああん。

兄貴のじゃ～うはいかんかっただろう？ 僕がもつと可愛がって
やろうか。

あーん、嬉しい。暁なんかじゃなくて、あたしは充さんのところ
に嫁ぐんだった。

快樂に身を委ねながら、愉しそうに弧を描いて笑う丹を塗った唇。
白い肌に咲いた、目の覚めるような色調に幾度と無く溺れたあの日
々。

充が街の女で遊ぶ時は、大抵一度で終わる。同じ女を何度も抱く
男ではないのだ。唯一、気に入ったのが妻のお梅。他は適当に遊ぶ
女として割り切つていて、今まで孕んだと言つてきた女も居ない。
尤も、孕んだと言つてくれれば生ませてみて、女なら始末、男なら子
供だけ取り上げる。充はそういう考え方の男だった。

ただし、千代子は別格だった。充と八歳離れた千代子。充がお梅
と夫婦になつた時にはまだ十歳の子供だった娘が、充と関係を持つ
た時には、十七歳。男を知つた立派な女に育つっていた。

千代子は街で声を掛けはしたが、彼女は一族の女。同じ一族とい

う、素性が知れた安心感。そして元々は兄の妻だった女。お梅よりも若い身体を抱く。奇妙な背徳感と高揚感が入り交じり、充は何日か千代子を囲つほどに彼女を抱いていた。

白い大福の様な身体。豊かな乳房。肉付きの良い尻。それはまさしく充好みの女の身体だった。加えて千代子は松沢一族の女らしく見目が良い。切れ長の目、可愛らしいおちょぼ口。お梅が大根なら、千代子は白菊。どうせ抱くなら華が良い。

しかし言つは言つても、お梅は”自ら氣に入つて家に入れた女”。自分に死ぐす女を、可愛いとと思う気持ちくらい充にもある。遊びは遊び。

孕めば千代子を囲つてやうづか　それぐらいの気持ちしか、充にはなかつたのだ。

充は過去を思い出して、ギリギリと歯軋りしながら千代子を問い合わせねば気が済まない思いに駆られていた。身籠つた時になぜ暁の元へ行つた。なぜ自分の元へ来なかつた。生まれたのが男だったとき、なぜすぐに自分に知らせなかつた。胤無しの暁の子ではないことをくらい分かつてゐるはず。なぜ、なぜ。

(糞クソアマ女がア、この俺を虚偽にいやがつて　どういつつもりだ畜生
!)

「父様」

ようやく頭を上げた肇は、充によく似た双眼を鋭く細め、不快感を顕にしながらも堂々としていた。ここで責ざめるよりでは松沢の男は務まらない。肇は叫びたい気持ちを堪えて、自慢の鷺鼻で大き

く息を吸い、奥歯を噛み締めながら充を見つめていた。

「父様。俺は先に帰った方がいいですか？」

その声も淀みなく凜としている。そつ、不測の事態にも動じない精神力を、この七歳の肇は持っていた。これぞ男。これこそ松沢の跡取り。充は己の誇り高い息子を満足そうに見やり、大きく頷いた。

「そうさな。先に帰つても構わん。俺はまだ話がある」

「母様には何と言つましようか。俺の口からは言わぬほうが良いでしょうか」

「嗚呼、黙つておけ」

「分かりました。では父様、お先に……」

するすると下がりながら部屋を出て、肇は静かに襖を閉めた。ここで初めてぐしゃっと彼の顔が歪む。親の因果が子に巡り、肇は生まれて初めて屈辱を味わつた。父の恥がそのまま己の恥に代わる。

(昭だと? この俺を差し置いて。許さん。絶対に許さん!)

「嗚呼、君は……」

肇が本家の玄関先でゲートルを巻いていると、後ろから声を掛けられた。振り向けば、先に見た昭が立っている。肇の目が鋭く細まり、矢の様に彼を射ぬいた。

「君は充さんのお子さんだね?」

「松沢肇です。何か御用ですか? 昭さん」

お互に語りかける言葉も声も穏やかだが、その目は火花を散らしている。この松沢家の跡取りとなるべく育てられた男達は、腹は違えど胤は同じ。血を分けた兄弟にありながら、絆も無ければ情もない。

「突然の事で驚いただろ？　自分に兄が居たなんてね」

「ええ、天地がひっくり返ったかと思いましたよ。まあひっくり返った天地なら、また元に戻せば良い事です」

十近く歳の離れた男を前にしても動じない肇は、鼻で笑つて返す。この昭が跡取りだと言うのなら、居なくなつてしまえば自分が跡取りだ。きっと父 充も同じ事を考えているに違いない。邪魔なら消せばいいだけのこと。

「はは。逞しいな。これは俺の身が危ういか？　ん？」

「それはこちらの台詞ですよ」

たたき土間の上と下で、熾烈な跡目争いの火蓋が切つて落とされた。

「兄上、千代子に会わせて下さー」

充は暁の部屋の前の廊下で手を付いていた。煙草に火をつけて、こめかみを小指で搔きながら鼻で笑う声がする。

「嗚呼、千代子ね。あれは死んだよ」

「な……」

「千代子が死んだからお前を呼んだのさ。今晚が通夜で、明日が葬

式だ。お前の家には今頃他ぞから連絡が行つてゐんじやないか？
今、戸籍上、俺の妻になつてゐるのは千代子だ。だから本家で葬式
をするよ」

千代子が死んだ。

充の思考が一瞬止まつた。まだ若い筈の千代子が何故に死ぬ。

「全く馬鹿な女だ。お前の子を孕んだから、お梅とお前を別れさせ
ると俺に言つてきたのさ、千代子は。俺も可愛いあいつにそれなり
の情はあつたといつのに」

暁さん、あたし、充さんの子を身籠りましたの。あの方の妻にな
りますわ。
薄汚い他家の女を追い出していくださいな。貴方ならそれくらいで
きるでしょ？

充の子……だと？ それは俺の子ではないのか？
嫌ですわ。貴方の子のはずがありません。貴方はお胤がないので
しううし？

御託は良いですから、さつさとあの女を娘もろとも追い出してく
ださいな。

暁の田が当時を思い出したのか紅蓮に染まつた。それは男の嫉妬。

弟の子を身籠つた元妻が、弟の後妻に收まりたいが為に力を貸せ
と言つてきた。そして、彼女の腹の子が男なら、将来、暁の養子に
なるのは田に見えている。なぜなら、彼には子ができるのだから。

好き好んで何度も妻を変えたわけではない。それぞれの妻にそれ
なりの情はあつた。千代子を妻に迎えた時も、何一つ不自由させな
いように可愛がつてきた。望んで彼女と離縁したわけでもない。で

きるなら、添い遂げたいとも思つていた。

それなのに蔑んだ目で自分を見下し、弟の妻になると放つ千代子。別れて幾ばくもなく弟に抱かれて、弟の子を孕んだという千代子。

「 馬鹿にし過ぎとは思わないか？ え？」

充は物を言う事を忘れた口をポカンと開けて、喉の渴きに氣を取りっていた。

孕んだ身体でお梅の前に立てば、何をされるか分からぬ。だから千代子は先に暁の元へ走つたのか。

「 どうせ、お前は千代子を何とも思つておらんかったのだろう？ お前口から千代子の名など、出た事もなかつたしな」

充は言葉もない。暁の言う事は本当だつた。遊びも遊び。火遊びにもならない遊びの女。充にとつて千代子は、兄の元妻という付加価値にこそ価値がある女だつた。兄に対する優越感を満たす一つの道具。言われるまで……ついさつ きまで忘れていた存在。

「お前が本家に来る度に、離れに閉じ込めた千代子にお前の様子を話して聞かせていたよ。」今日もお前の名一つも呼ばなかつた」と ”お梅が男を生んだ。充の子だ” と。迎えに来ないお前を呼んで、ここから出せと叫んで、お前に会いたいと泣きわめいて、どんどん錯乱していく千代子を抱くのは面白かったよ

充の背中をじつとりとした冷たいものがひた走つた。暁が恍惚に似た笑みを浮かべて自分を見ているのだ。煙に燻されたその目が映すのは何か。

「本当に馬鹿な女だ。ただ一言、俺の子だと言えれば良かつたものを……。嘘でもそうしていれば全てが丸く収まったのに。そんなにお前が良かつたんだろうかなあ。あれはお前を好いていたのかね？まあ、そんな事も今となつちやあ分からんし、俺にひとつちやあどうでも良いがね」

煙草の火を揉み消して、暁はふいと背中を向けた。

「お前は良いね。好いた女と添い遂げて。子も沢山いて。お前が認めなくとも、お前の子が跡取りだ。千代子が恨んでいるのは、閉じ込めた俺だろうかね、忘れていたお前だろうかね。俺はあの世で千代子に会うのが楽しみでならないよ」

そこまで言られて充はようやく気が付いた。暁は千代子を好いていたのだと。その想いは千代子には届かず、当主であるが為に離縁せざるを得なかつたのだと。その女を自分はもて遊んで捨てたのだと。

「千代子が生んだのは俺の子だ。昭は俺の子だ。誰が何と言おうとな」

濶みないその声は、充の野望を折るのに十分な力を持つていた。充が気が付いた時には、空は茜に染まり、部屋には暁は居なかつた。痺れた手首を摩りながら立ち上ると、自分と同じ顔をした男と目が合つ。

「お前……」

「ヤリと口角を上げながら、近づいて来る昭に、充は寒々しい物

を感じた。確かに自分にそっくりだが、色白なところは千代子に似ている。その白い肌は、茜に染まりながらもどことなく気味が悪い。

「何とお呼びしましょうか？ 父ではない貴方を、俺は何とお呼びしたら良いですかね？」

「……好きに呼べ」

「はは。そうさせて貰いますよ。叔父さんで、良いですかね」

「ああ」

クククと喉の奥で笑って、小鼻を搔きながら池のある縁側を眺め、斜陽に向かつて指を指す。その先には小さな離れがあつた。窓という窓に格子を嵌め、松の木に覆われたそれを、昭は母千代子が居た離れだと教えた。

「大変な人でしたよ。息子である俺を、何度も殺そうとしてくれましたし。頭が可笑しかったんですかね」

あつけらかんと言う昭は、母はこの顔が気に入らないと言つていましたよと、自分の頬を撫で、ペチペチと軽く打つた。

「そう言えば、肇君だつたかな。彼は叔父さんにそっくりですね」

何が言いたいのかと、充が苦虫を噛み潰したように頬を引き攣らせると、昭はすたすたと暁の部屋に入り、机の上にあつた煙草入れを勝手に開けて火を付けた。胡座を崩し、片足を立てて煙を燻らせる。ふうと吹き付けられた煙を手で払つて、充は昭を見下ろした。

「叔父さん、天地は返らないことを肇君に教えてやつた方がいいですよ。天も地も、初めから動きはしないとね」

若いその身が放つ威圧感は、暁のそれによく似ている。

「お前は俺の子ではないな……」

愉しそうに口角を持ち上げて、声を上げるその笑みの中に、充は千代子を確かに見た。

昭の葬儀如来像

千代子の葬儀はひつそりと行われた。参列したのは松沢一族の中でもごく一部の人間で、特に他家から嫁いだお梅の参列は許されなかつた。

「父様……母様はご存知なのですか？」

「言つていない」

お梅に誰その葬儀とは言わず、喪服に身を包んだ充は、本家に出向くとだけ言い残し、筆を伴つて家を出た。

筆は何か言おうと口を開いたが、ついで出ない言葉に押し黙り、ただ父の後ろに従つた。

充なら昭を引きずり下ろしてくれる。そう思つていたのに、肝心の父の背中は、いつもの半にも満たない程に小さい。

自分が帰つた後に、本家で何かあつたのは間違いなさそだが、それを確かめようにも確かめていいものか分からぬのだ。触れてはいけないような気配さえする。

筆はままならぬ事に苛立ちを覚えながらも、父親譲りの外面の良さでやり過ごす羽目になつた。

誰も泣く者の居ない葬儀で、棺の中の千代子の頬を愛おしそうに撫でている暁は、目立つていた。

「嗚呼、筆君も来たのかい」

後ろから声を掛けられ振り向けば、それは憎い異母兄。筆が黙つ

ているのも気にせずに、昭は手に持っていた木彫りの釈迦如来像を掲げて見せた。全体的に素人の手彫りと分かる荒々しさはあつたが、器用に作り込まれている。

「俺が彫った。故人に持たせるのに、念を込めたよ。死出の旅の供になればと思つてね」

昭は軽く如来像を撫でて、千代子の棺に納めた。そんな様子を肇は、泣かせる三文芝居宜しく耳糞を穿りながら眺める。

何と滑稽か。死ねば何も残りはしない。腸に残った恨み辛みも、全部炎に焼べてお仕舞いだ。木彫りの如来像など、薪を一本足してやつたのと同じじやないかと鼻で笑う。

「死んだらどこに行くんですか？」

肇は少年らしい問い掛けに、昭は口元に笑みを称えて答えた。

「さあ、ね。体は土に還るが、魂はどうかね。本当のところは誰も知らないのさ。坊主も神主もお釈迦様も。 そうだな、俺が先に死んだら君に教えてやろつ。三途の川があるのかも、地獄の沙汰も金次第なのかも、教えてやるよ。約束しよう。その代わり、君が先に死んだら俺に教えに来いよ」

「早く知りたいです」

「ああ、俺も早く知りたいね」

笑いながら交わす会話は、互いの死を願うもの。

極楽も地獄も、天も地も、味噌も糞も、昭も肇も同じ事。全部一緒にしたにして、鍋の中でかき混ぜれば、案外分からぬものかもしない。呑むまで味が分からぬそれを”苦汁”と名付けて、そこ痴れ者に呑ませてやろう。

千代子の葬儀が終わってすぐ、充に召集令状が来た。ペラペラの薄桃の紙が教える事は、お国の為に命を賭せと云つ事ではなく、彼が松沢の庇護を外れた事を知らしめていた。

「これは……何かの間違いでは……」

「俺も四十一だからな」

絶句するお梅を前にして、充は静かに赤紙を持ち上げた。当時兵役は四十歳までだったのが、この年の昭和十八年に、四十五歳にまで引き上げられたのだ。兵が足りない。つまりはそういう事だ。

ジッと正座して「」を見つめる肇に、充はひとつ言い含めた。

「肇、お前は分家だな……。堪えろ」

膝の上で握り締めた両の手の拳の色が変わる。跡取り跡取りとちやほやされて育った肇が、汚泥交じりの苦汁を一杯、呑み干した日だつた。

いつか昭にも、この言ひしれぬ味を知らしめてやろうと、肇は心に誓つた。

戦場に充が立つた昭和十九年八月。砂糖の配給が真っ先に止まり、味噌も醤油も、そして米も極端に不足した。充が居ない集落を、人前に出ない暁に代わつて上手く纏めたのが、昭だった。

「まつちゃん、俺、腹減った」

鶴岡は鳴り響く力もない腹を抱えて、涙目になつてゐる。

鶴岡はいつもいつでも肇の後ろを付いて回り、舍弟宣しくしていつたが、どうにも頭が悪かった。何でも鶴呑みにする性分なのか、肇を全面的に信頼しているのか、疑う事を知らない。

自室で少年の科学を読んでいた肇は、顔を顰めて、彼に学校裏の川で魚でも釣つたらどうだと言つてやつた。鶴岡はそれは良い考えだと、膝を打つて立ち上がる。

「まつちゃんは頭が良いな。ちょっと俺、魚を獲つてくれるよ。まつちゃんも食べるかい？」

「俺はいらないよ」

肇は軽く手を振つて、また少年の科学に目を落とす。

「それ、面白いのかい？」

「ああ、今日は戦闘機の模型が付録でね。後で作つてみたいのさ」

「へえ。まつちゃんが作るところを見たいから、明日また来てもいいかい？」

「ああ、かまわないよ。なら付録は明日作るといつよ。川魚はよく焼けよ」

「分かつたよ」

鶴岡は一度家に帰り、たも網を持つて学校裏の川に向かつた。油が浮いた川に藻が張つて視界は良くないが、鶴岡はたも網を川に沈め置いて、そこに魚を追い込んでみた。

何とか一匹フナが網に入つた時には、一時間は過ぎただろうか。腹を満たすつもりが、余計に腹が減つたとブツブツ咳いて、鶴岡は

岩にフナを叩きつけて絞めた。

さて、こじつをどう食べてやろうか。家に持つて帰れば取り上げられ、兄弟達の餌になる。こじで焼きたいが、火を使えば叱られるだろ。

筆ならうするだらうかと考えた末、彼が読んでいた少年の科学を見せてもらつた時に、虫眼鏡は太陽の光を集めて熱を起こすとあつたのを思い出した。これは使える。妙案だ。

早速、鶴岡は理科室に忍び込み、大きな虫眼鏡をひとつ失敬すると、岩の上に置いたフナをその虫眼鏡の光で焼いてみることにした。

「ちょっと生かな？」

だが育ち盛りの腹はもう限界だ。思ったより煙は出ないが、身が少し茶色になつたところで、鶴岡は満足そうにフナを食べた。

そして、魚を獲つたら筆に相談すれば良かつたと、彼は激しく後悔する事になる。

翌日、学校に来ない鶴岡を不思議に思つた筆は、鶴岡の家を訪ねた。

貧乏長屋に顔を顰め、玄関先に置かれたタライをわざと蹴つ飛ばして音を立てる。

「わあ、驚いた！ こんな所にタライが。 すみません！ 鶴岡

君の小母さん、お出でですか？」

「はいはいはい、まあ松沢の坊ちゃん。いつも僕がお世話様です」

丁寧に膝を折る鶴岡の母に、肇は彼の様子を尋ねた。

「今日、鶴岡君と遊ぶ約束をしていたのですが、学校を休みだつたから心配しました。彼はどうしたのですか？」

「それが腹が痛いと言つて転げ回つて。下痢も酷いし……」

（さては魚にあたつたな？ 馬鹿め、よく焼けと言つたのに）

どうやら鶴岡は家人に内緒で魚を独り占めして、ろくに火も通さずに食べたのだと察すると肇は眉間の皺を深くした。

「鶴岡君、栄養失調とかではないですか？」

栄養失調でも下痢はする。息子にろくに食べさせていらない自覚のある鶴岡の母は、嘆きながら前掛けで鼻をかんだ。

「可哀想に。ちよいと俺にアテがありますから、また来ます。お大事に」

肇はこれはこれでまた良い機会だと、玄関先のタライをまた蹴つ飛ばして鶴岡の家を後にした。

（たまには卵が食べたいなあ）

育ち盛りなのは肇も同じ。意地汚い真似は矜持が許さないが、食えるものがあるなら何でも食いたい。肇は集落の中で、鶏を飼っている家を尋ねた。

「すみません小父さん、松沢の倅です。一寸相談があるので……」

…

「なんだい？ 肇君が相談など初めてじゃないか」

肇はさも神妙そうな顔をして、国民帽を取つた。

「僕の親友の鶴岡君が、えらい下痢をして苦しんでおるので。彼の家は兄弟も多いし、栄養失調かもしれません。精を付けてやりたいので、卵を分けてくれませんか？ 彼が元気になつたら、僕と彼で鶴小屋の掃除をしますから」

「君はなんて性根の優しい子なんだ。君のお父上には世話になつた。卵くらい安いものさ」

情に脆い男は、肇が貧乏鶴岡に心を碎いているのに感極まって、卵を四つ分けてやつた。

「ありがとうございます、小父さん。これで鶴岡君もきっと良くなります」

鶴岡はただの食あたりだ。一日一日すれば下痢も止まる。芋粥だけでも大丈夫の所を、卵粥でも食べさせてやれば、鶴岡の腹も満足するだろう。そしてこの戦利品。四つも鶴岡の馬鹿にくれてやるのは勿体無いと、肇は鶴岡の家に行く道すがら、生卵をちゅるんと一口飲み干した。

「小母さん、卵を貰つて来ましたよ。鶴岡君に食べてやってください」「卵！」

貴重な卵を三つも受け取つて、鶴岡の母は一つを肇に返した。

「愚息に二つも頂けません。坊ちゃんのお宅で召し上がるがってください」

「ありがとうございます？ では遠慮なく。鶴岡君には早く良くなつて貰わなくては。卵をくれた小父さんと、鶴小屋の掃除を一人でする事を約束したのです」

「まあ！ そうでしたか、そうでしたか。そんな掃除は私と俸が致します。坊ちゃんありがとうございました」

「鶴岡君に良くなつたら戦闘機の模型を作ろうと伝えてください、では失敬」

筆はまんまと卵を一つ手に入れて、意氣揚々と自宅に帰った。

「母様！ 今日は卵粥が食べたいです！」

腹は二つして満たすのさ。頭を使え馬鹿野郎と、筆はニンマリと笑つてお梅に卵を手渡した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6830u/>

松沢一族

2011年11月11日16時01分発行